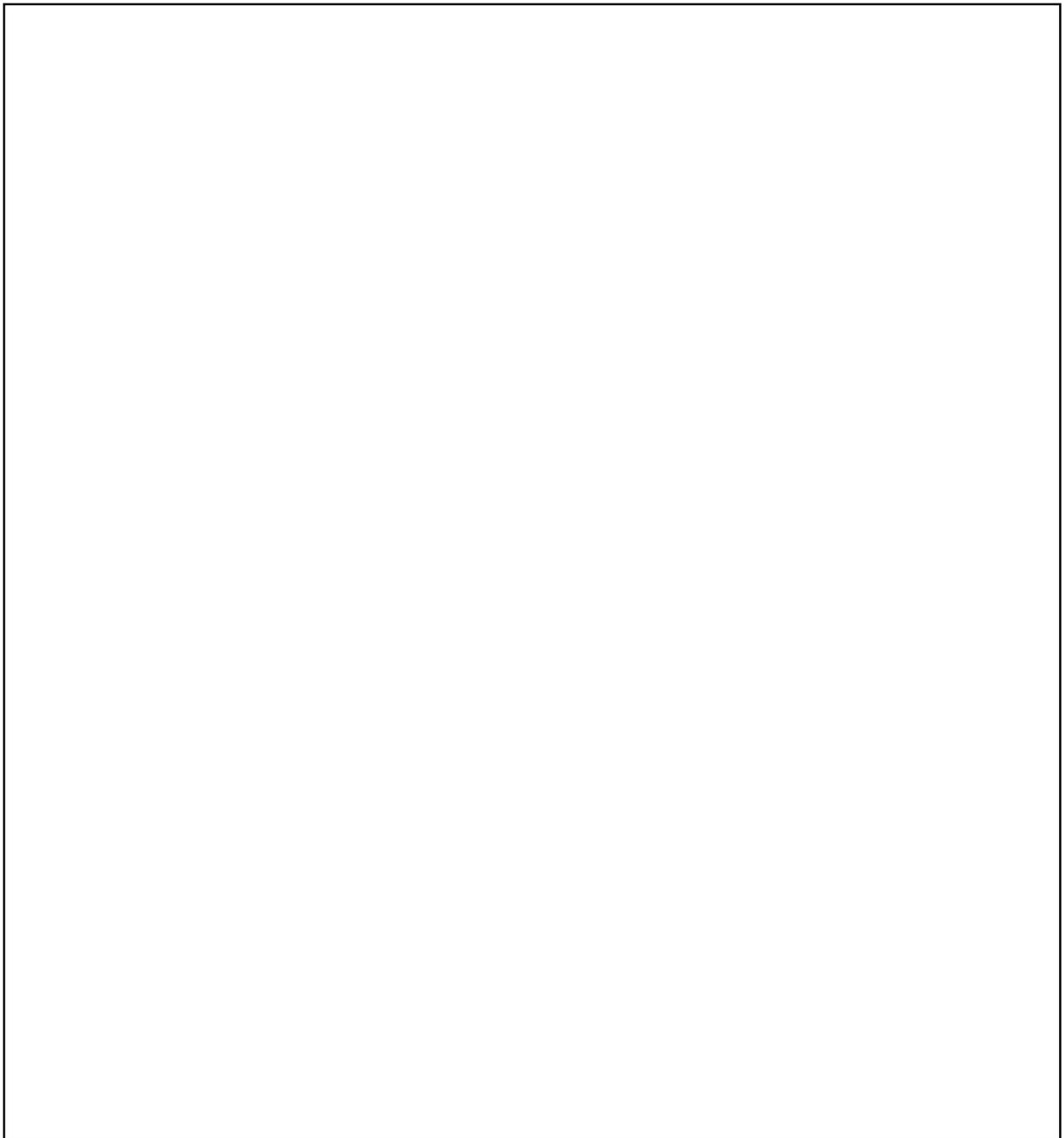


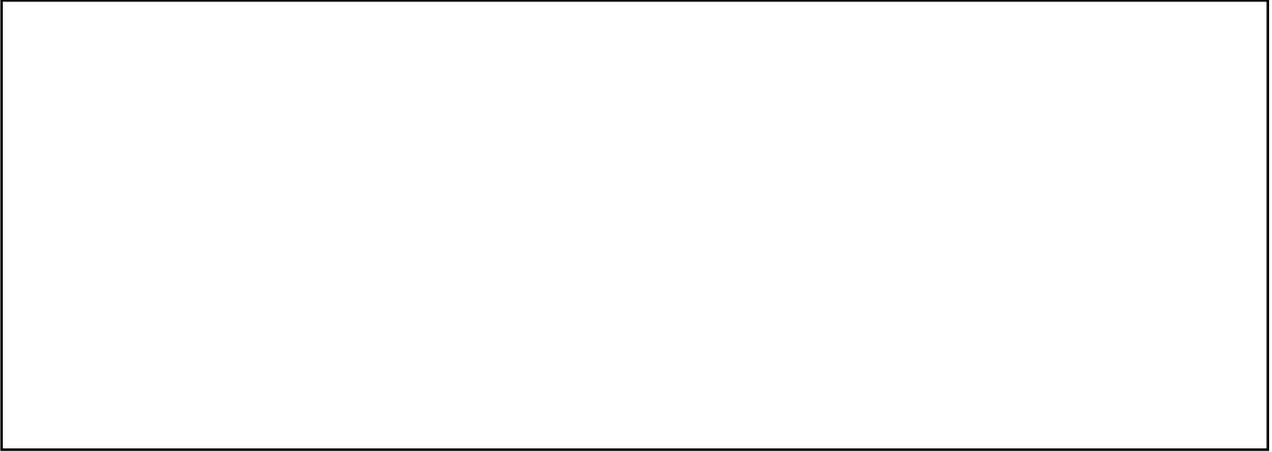
2025 年度用 ドイツ語 (9 月)

〈出題の意図〉

哲学に特有な探求の徹底性とその開かれた学的追究からの問いの在り方を論及している、今日のドイツ語圏で名高い著者の〈哲学史〉を要約した著書の序論の部分から、大学院で哲学を専攻する受験者たちの内でドイツ語選択者のドイツ語テキストの広い範囲での理解力を試験する。

〈解答例〉





Aus : Otfried Höffe, Kleine Geschichte der Philosophie, München 2001,
S. 7 - 8.

哲学史

出題意図（例年同じ）

哲学研究を進めるために必要な哲学史上の基礎知識と、重要なテーマの史的展開を踏まえた論述力と批判的思考を確認する。

解答または解答例（＜博士前期・後期共＞）

- I. 哲学研究を進めるために必要な基礎知識と解答を記述するに際しての論理性を見る。解答例を示すには馴染まない。
- II. 哲学史上重要なテーマの史的展開を論述する力と批判的思考を解答で披瀝することを求めている。解答例を示すには馴染まない。

2025 年度 9 月入試 (英語)

出題意図

英文を正確に日本語へと移換する基礎的な読解力に加え、テキストの全体構造を俯瞰し、その背後にある哲学的主張を的確に把握する洞察力を問う。あわせて、理解した内容を論理的に英語で再構成し、表現する能力を評価する。

問 1

問 2

著者が提案する定式化は次の二点である。

- (1) 科学はその理論によって、「世界がどのようなものであるか」について文字どおり真な物語を与えることを目指す。
- (2) ある科学理論を受け入れるとは、その理論が真であると信じることを含む。

問 3

本文に即すと反实在論とは、理論の提案者がその理論を「真である」と主張するのではなく、理論を提示したうえで、真理には届かないかもしれないが、たとえば経験的適合性、包括性、諸目的にとっての受容可能性を主張する立場である。

問 4

(2) は、パトナムの「奇跡論法」(实在論だけが科学の成功を奇跡にしない) を述べている。

しかし著者は、科学の成功の説明を「理論が対象に適合している／理論が世界を鏡映する」というスコラ学的 (实在論的) 説明に限定すべきでないと考える。そこで著者は、成功の説明を生物学的・ダーウィンの説明として構想する。科学は生物学的現象であり、環境との相互作用を助ける営みである以上、成功の理由は「真理への到達」を直に仮定せずとも、選択と淘汰で説明できる、という見通しである。その要点は、(i) 科学理論は「競争」にさらされ、(ii) うまくいかない理論は生き残れず、(iii) 成功した理論だけが残る。このようなことから、現に成功している理論があることは奇跡ではないことになる。

問 5

